



羅針盤

2017年度 第11号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

2017（平成29）年10月25日発行

「小論文」への道

■知らなければ書けない

かつて大学受験の為に、小論文の添削指導を利用して数ヶ月勉強したことがあった。毎回違う題に合わせて書くのは簡単ではなかったが、それなりに書き上げていたのだと思う。いよいよ志望校に合わせて練習を始めてもいいかと、母に出してもらった題は「文化」。はたと困った。一行も書けない。展開どころか、糸口もつかめない。なぜか——今でこそ「国際文化」花盛りだが、当時の私は日本史や世界史で習う「〇〇文化」は聞いたことがあったが、それ以外に「文化」を取り立てて考えることも無かった。世の中でどんな問題としてそれが語られているかなんて知りもしなかった。「知らなければ書けない」という当たり前のことに気づいていなかった。

■材料がなければ書けない

さてそこからは新聞記事やニュースの言葉に反応した。新書等も読んでみた。「文化」と「文明」の違いは何か。日本の「文化」って何だろう。日本は生み出すのでなく、他国のものを取り入れて発展させる「文化」だな……さまざまな材料が蓄積されてきたのだろう。さまざまな角度から考える癖が出来てきた。（この「癖」が小論文では何よりの武器になる。）同時に大きな「文化」という題から、自分なりに展開しやすい小さな題を設定して書くことが出来るようになってきた。自分で集めた材料を基に書くことを決める、つまり自分で「切り口」を決めて書けるようになってきたのだ。

■「リライト」こそ上達の道

だが「小論文を書き上げる」から「本物の小論文にする」までにはまだハードルがある。自分の言いたいことは伝わっているか、人に納得してもらえる論理の展開なのかは添削してもらって初めて客観的に見えてくるのだ。自身でも文章を時間をおいて眺めると欠点も見えてくるし、書いた時にはこだわっていた具体例もこの組み立ての中ではいらぬ、とぼっさり削ることもできるようになる。「リライト」こそが上達の道なのだ。受験生ならこの段階は「通信添削」ではない。「模擬面接」と同様直接先生に指導を仰ぎ、徹底的に同じ題で書き込む必要がある。これは自分の知識の曖昧な点を噛みしめ、自分自身を深く見つめるハードな作業になることもある。だが、書くことの積み重ねが思考を構造化する訓練となる。この訓練は「一生もの」である。

■受験間近の3年生のために

使うとしたら国公立の後期試験、でも使うかどうかはわからないからまだ何も手をつけてないという人も含め、受験勉強中はなかなか小論文に手を出せないかもしれない。が、志望校の過去の題ぐらいいは頭に入れよう。これに関する新聞記事を貼ったり、課題文のもとになった書名をメモしたり、思いついた考え（できれば主張とその理由の形で）を書き留める小論文用ノートを作っておきたい。「書く」ことのためのайдリングがあるかどうかで走り出しは変わってくる。

ちなみに大学受験では、「社会の変化」「グローバリズム」が変わらず問われ続けているテーマである。授業で今やっている、そうそれです！（田口）

理系の進路選択

■自分は理系に向いているか？

理系に進む人は志をもっていることが基本的に必要です（・気合　・結果が出るまでとことんやり抜く粘り強さ　・地道に積み上げていく勉強の持久力）。あなたに理系で人生やっていくというこだわりや、実力ではまわりに負けないという意気込みはありますか？　たとえば化学では、原子（1モル）の質量をできるだけ正確に決めたい、と一生をかけている人がいます。（こだわり！）

データを図や表にまとめたり、データを客観的に判断したりできる力も必要です。きびしい話ですが、たとえば模試の個人成績表を冷静に受け止めて、勉強の計画や進路目標を練り直すというような、データを読んでその後に生かす力が理系志望者には必要です（ときどき、成績表が厳しくても、俺はちがう！このノリでうかる！なんて拡大解釈する人＝理系志望者なのに、理系っぽくない人＝がいますね）。

数学は、農学系ならIA, IIBまでの大学も多いですが、ふつう数学IIIまで必要です。単に受験科目というのではなく、数III程度の力は、大学の授業で基本的に必要です。

理系で将来研究・開発職に携わるには、大学院に進んで「一人で研究を進められる力」を身につけないといけません（もちろん研究で協力する機会があります）。研究や開発は、まだ誰も見出していない現象を解明したり技術を極めたりする作業です。他人を頼るのではなく、独自の視点で道を切り開き、アイデアを出せる「実力」が求められます。これは、本やネットから調べてまとめるというのとは別物です。学生生活は6年以上、学費もその分かかります。

■教科書を大切に

参考書をやたら買うより、あるいは問題集の簡単なまとめページを見て済ますより、教科書を基本にしてていねいに勉強しましょう。「この説明は何ページあたりに書いてある」と言えるくらいに教科書を読み尽くしましょう。そのうえで、教科書の本文や例題で使われる言葉遣いや表記法をまねできるようにします。そうすると、問題演習で判断がブレることなく解答を導けるようになれますし、記述式問題を答えるときの力にもなるでしょう。

■血を見ても大丈夫か？　昇天してもらうこともできるか？

生物・医療・農学系の分野によっては、毎日血液を取り扱ったり、勉強のために動物（家畜）を自分の手で昇天させてあげて、ありがたく実験観察したりということも現実にあります。心理的に受け入れられるか？　自分にあった分野なのか？　あらためて考えてみましょう。

■未知の分野はたくさん

研究者の数より研究テーマの方がずっと多い分野があります。生物系はその例で、たとえば、松林のマツを枯らす原因となるセンチュウを防除するよい策は、まだ見出されていません。待ったなしの状況ですけれど。気合と実力がある人なら、理系選択大歓迎です。　（三池田）